

* * * 「イラク戦争 10 年」キャンペーン報告 * * *

2013 年 6 月 「イラク戦争 10 年」キャンペーン(イラクテン)実行委員会事務局



イラク戦争から 10 年を振り返るとともに、この戦争を過去のこととするのではなく、日本の今後の針路を考える上でも教訓を汲み取ろうという趣旨でキャンペーンを行いました。このキャンペーンの一環として、イラク戦争開戦日の 3 月 20 日に東京、早稲田大学を会場にメインイベントを実施しました。

※ 本キャンペーンは、**公益財団法人・庭野平和財団**、**および一般財団法人・大竹財団**からいただきました助成金をもとに、一般市民や賛同団体の賛同金をいただき実施することができました。また、早稲田大学平和研究所には 3 月 20 日メインイベントを共催の上、会場を提供いただきました。
皆さまのキャンペーンへの多大なご支援、ご協力に深く感謝いたします。

1. 実行委員会主催の催し

キャンペーン実行委員会では 3 月 20 日のイラク戦争開戦日に開催のメインイベントを中心に、イラクと英国から招いたゲストを迎えての催しを東京で実施しました。

招聘ゲスト

- **アリ・マシュハダーニさん (イラク/フォトジャーナリスト)**
1969 年イラク、ラマディ生まれ。現地人ジャーナリストとしてロイター通信社などと契約。イラク戦争以来、米国の占領の現実を報道。
- **ローズ・ジェントルさん(英国/「反戦軍人家族の会」設立メンバー)**とお連れ合いの二名
2004 年に英国軍兵士としてイラク戦争に派遣された息子を亡くす。イラク戦争を始めたブレア首相の責任を問い合わせ、訴訟を起こす。

■ 3 月 18 日(月) :

海外ゲストを迎えての記者会見 (18:30~ 高田馬場 JIM-NET 事務所にて)
→ NHK の番組制作会社のほか、東京新聞、朝日新聞、北海道新聞等 5-6 社が出席。
翌日の院内集会と合わせて 3 月 20 日付けの報道に反映されました。(朝日新聞、東京新聞等)

■ 3 月 19 日(火) :

イラク戦争の検証を求める院内集会 (17:30~ 衆議院第 2 議員会館第一会議室にて)
→ 院内集会の模様は東京新聞、朝日新聞等で報道されました。

※国会議員の出席 = 7 名 (敬称略)

近藤昭一(民主党/衆院議員) 辻元清美(民主党/衆院議員)
赤嶺政賢(共産党/衆院議員) 田城郁(民主党/参議院議員)
川田龍平(みんなの党/参議院議員) 谷岡くにこ(みどりの風/参議院)
福島瑞穂(社民党/参議院議員)

※前議員の出席 = 2 名 (敬称略)

斉藤つよし(民主党/前イラク戦争の検証を求める議員連盟代表)
服部良一(社民党/前衆院議員)

※議員秘書の出席 = 4 名 (敬称略)

藤田幸久(参議院) 議員秘書 田島要(衆議院)議員秘書
横路孝弘(衆議院) 議員秘書 大野元裕(参議院)議員秘書

- 3月20日(水・祝)：イラク戦争10年メインイベント
→ メインイベントは主催者の見込みを越え、500名余りの参加者があり盛況となりました。
詳細の報告を別に記します。

2.「イラク戦争10年」キャンペーン 賛同イベント

2013年3月～4月にかけて日本全国(札幌、東京、千葉、名古屋、金沢、大阪、広島、沖縄など)で海外ゲストのスピーキングツアーおよび関連する催し20件余り(キャンペーン実行委員会の主催を除く)が開催され、イラク戦争10年の認識を広めることができました。

海外ゲストのスピーキングツアー

- 3月22日 「イラク戦争10年検証のつどいinおおさか」(大阪、大阪平和人権センターほか)
*アリ・マシュハダーニさん
- 3月23日 「開戦から10年 今、問う(パートⅡ) イラク戦争の10年と日本」
(広島、NO DUヒロシマ・プロジェクトほか) *アリ・マシュハダーニさん
- 3月24日 「今問う、イラク戦争の10年と日本」(札幌、ほっかいどうピースネット事務局、セイブイラクチルドレン札幌) *ローズ・ジェントルさん
- 3月24日 「アリさんとゆんたく イラク人ジャーナリストが見るイラク」
(沖縄、共催:NPO法人沖縄NGOセンター、(特活)ONE LOVE) *アリ・マシュハダーニさん
- 3月25日 「イラク開戦10年と日本・沖縄を考える」(沖縄、沖縄県憲法普及協議会)
*アリ・マシュハダーニさん

「イラク戦争10年」キャンペーン 賛同イベント

- ① 2月18日～3月18日 写真展「イマジンイラク」(大阪)
- ② 3月8日～13日 絵画・写真展「時代を生きる子どもたち」(東京、JIM-NET)
- ③ 3月13日 イベント「イスラム文化に親しもう イラク編」(東京、JVC/アーユス)
- ④ 3月15日 イベント「イラク戦争から10年 混迷の中から生まれ出る希望」(東京、JVC/アーユス)
- ⑤ 3月15日 イベント「アルアリ医師福島交流会」(福島、JIM-NETほか)
- ⑥ 3月17日 講演「核廃棄物質の軍事利用である劣化ウラン兵器」
(広島、NO DUヒロシマ・プロジェクト)
- ⑦ 3月18日 報告・交流「イラク戦争10年～ウラン兵器禁止に向けて」(大阪、ICBUWジャパン)

- ⑧ 3月20日 ウォーク「イラク戦争開始から、10年 さっぽろピースウォーク」
(札幌、北海道平和運動フォーラム、ほか)
- ⑩ 3月20日 ウォーク「母から始まるピースウォーク、イラク開戦から10年目の3月20日」
(金沢、ピースウォーク金沢 2013 実行委員会)
- ⑪ 3月21日 院内集会「第七回「劣化ウラン兵器禁止に関する勉強会」」(東京、ICBUW ジャパン)
- ⑫ 3月21日 講演会 「イラク戦争が何だったのかを考える講演会」(名古屋、セイブ・イラク
チルドレン・名古屋ほか)
- ⑬ 3月26日 講演会 「イラクと福島」(大阪、かわちの9条の会)
- ⑭ 3月30日 講演会 「武力で平和はつくれるのか ～泥沼のイラク戦争から学ぶ～」(札幌、北海
道
青年革新懇)
- ⑮ 4月6日 シンポジウム 「イラク戦争10年シンポジウム in CHIBA」(千葉、イラク戦争 10 年を
考える千葉の会)
- ⑯ 4月20日 講演会 「だけど、生きよう！「やっぱり平和が好き」いのち輝かせて」(札幌、平和
を語ろう実行委員会)

イラクテン・メインイベント 「開戦から10年 今、問う イラク戦争の10年と日本」

(2013年3月20日、早稲田大学14号館を会場に終日開催。写真展や非戦を選ぶ演劇人の会によるリーディングも同時開催しました。)

1. 全体会 (10:00-11:30、201教室)

全体会では、イラク10実行委員会共同代表の志葉玲から基調報告が行われた後、イラク人ジャーナリストのアリ・マシュハダーニさん、イラクで死亡したイギリス兵の母でブレア政権の責任を追及するローズ・ジェントルさん、元外交官の孫崎享さんが発言しました。それぞれの発言要旨を紹介します。

○イラクテン実行委員会より基調報告

基調報告では、11万人以上のイラクの一般市民が殺され、現在も犠牲者が続いている、約300万人の人々が避難生活を続けているなどイラク戦争が終わったとは言えないことを改めて確認しました。そして、英国やオランダでの検証で、イラク戦争が国連憲章違反の違法なものとみなされていること、民間人虐殺や非人道的兵器の多用、拷問や虐待が国際人道法に反することで、責任が追及されるべきもの、と指摘しました。また日本にとっても、憲法問題、在日米軍問題などと共に、平和国家、民主主義国家としてのあり方が問われている、と問題提起をしました。

○アリ・マシュハダーニさんの発言

女性や子どもを含むイラクの民間人を虐殺する等、米軍による戦争犯罪を追及していたアリさんは、米軍に不当に拘束され、拷問を受けた体験に触れ、「私のカメラが、彼らのいう“大量破壊兵器”だったのかもしれない」と皮肉りました。「イラク人ジャーナリストの行く末は、殺されるか、逮捕されるか、誘拐されるか、行方不明になるかのどれか」と現地での取材活動の困難さも語りました。また、「日本がイラク戦争に関わったことはショックだった」として、「日本は戦争に自ら関わったのか、問い合わせたかった」と日本の政治の責任についても触れました。その上で、平和と発展を基盤とする國のあり方を、日本とイラクから始めていこうと呼び掛けました。



○ローズ・ジェントルさんの発言

ローズさんは、「息子の死後、なぜ彼がイラク戦争に行かなくてはいけなかつたのかと自問自答してきた」と語り、イラク戦争の検証委員会の設立を求めてきた経緯を振り返りました。また、検証委員会により、当時首相としてイラク戦争を推進したブレア氏のウソが暴かれ、「現在イギリスでは、多くの人々がブレアの主張が誤りだったと考えている」と報告しました。さらに、「私達が次に取る行動は、国際刑事裁判所にブレアを連れていくこと」とさらなる戦争責任追及を行う意向を表明。「日本でもイラク戦争検証委員会が設立されると期待しています」「一人一人の力は思ったよりも大きい。一緒にたたかっていきましょう」と日英の市民の連帯を呼び掛けました。

○孫崎享さんの発言

孫崎さんは、集団的自衛権の行使容認や、改憲などに触れ、「安倍政権の政治的方向と大きな関係がある」とイラク戦争の検証が正に今日の課題であることを強調しました。今も責任逃れに終始する、当時の政権関係者らについて「イラク戦争が合法性を持たないことは、開戦前から充分に把握できた」と批判。「間違っていても、その時々の流れに乗って発言していれば、どんどん出世する」と戦争を支持した学術界や、言論界の責任も指摘しました。「米国に追随することは日本のためになるのか」と繰り返し問題提起した上で、「米国が『脅威』を決め、『脅威』とされた者を殺してもいいという流れが作られている」「国連憲章にあるように、世界中が他国を攻撃しないと約束することが、平和につながる。それを説得させ得る一つの材料が、イラク戦争がいかに間違っていたかを検証することだ」とイラク戦争の検証は日本のみならず世界の平和のため必要だと訴えました。

12:00-13:00 (201 教室)

ランチタイムイベント：リーディング “あきらめない 2003-2013 イラク戦争の 10 年”

構成・演出：非戦を選ぶ演劇人の会 関根信一

出演者：渡辺えり、根岸季衣、大鷹明良、流山児祥、ほか

2. 分科会 (13:00-16:30)

午後には以下の4つのテーマ別の分科会で議論を深めました。

どの分科会も 300 人規模の教室が多数の来場者で埋められ盛況となりました。

分科会のテーマ

1) イラク戦争と劣化ウラン	(101 教室)	
2) ローズさんと語るイラク戦争検証	(102 教室)	以上 13:00-14:30
3) アリさんと語るイラク占領の現実	(101 教室)	
4) イラク戦争と自衛隊・在日米軍	(102 教室)	以上 15:00-16:30

第 1 分科会「イラク戦争と劣化ウラン」

「劣化ウラン弾問題の現在—被災地(イラク・バスラ)の声／禁止したコスタリカからの呼びかけ」

■開催趣旨

1991 年の湾岸戦争で初めて実戦で使用された劣化ウラン弾の被害が明るみになり反対運動が盛り上がる。国際社会は、非人道的な兵器として禁止することが出来ずに、2003 年のイラク戦争で再び使用されることを許してしまった。被災地の現状は 10 年たってどうなのかを検証し、今後、劣化ウラン弾が使われることが無いようにするのはどうしたらいいのか、考える。

■司会：佐藤真紀(イラクテン実行委員会、JIM-NET)

■ゲスト：ジャワード・アル・アリ (バスラがん登録センター顧問)

カリーム・アルメルタハ(バスラがん登録センター代表)

イザベラ・マクドナルド(ICBUW 運営委員)

■通訳 小西克哉

■コメント他 嘉指信夫、振津かつみ、森瀧春子(ICBUW 運営委員)

■概要、

アル・アリ医師からは、300 か所以上が DU で汚染され、1995 と 2005 のがんの発生率を比べると、乳がんの発生率が最も高いとの報告がありました。イラクは、DU の被害国として、世界に向けて劣化ウラン弾の禁止を訴えていきたいが、残念ながら 10 年間大きな成果はでていないとのこと。カリーム医師からは、癌の原因を劣化ウラン弾であると確定することがなかなか難しく、そのためには、がん登録を正確に行い、疫学的に証明していくことが必要であり、日本の技術協力がこれからも続けてほしいことが述べされました。続いて、医療支援を行ってきた JIM-NET の佐藤が、どのように、イラクの小児がんを支援してきて、そのような成果があったのかを解説しました。10 年間の支援により、ある種のがんは、生存率が 30%ほどしかなかったのが、70%ほどにまで改善されています。次いで嘉指信夫（ICBUW 運営委員）から ICBUW の活動の概要を説明しました。国連では、禁止法を作ろうという議論まで行かず、各国が意見を提出するにとどまっているが、ベルギーとコスタリカは国内法で禁止しました。続いてコスタリカで禁止法を制定することに尽力したイザベラさんが紹介されました。1948 年にコスタリカでは、市民戦争を経験し、軍隊を持たない国を宣言しました。イラク戦争でも反対運動が盛んで、2007 年に ICBUW の会議を行った際にイラク帰還米兵らを招待し、大統領にも会ってもらいました。そしてアレキサンダー・モラモラ議員が中心となり、劣化ウラン禁止法を成立させました。この劣化ウラン禁止法は 1995 年の武器の禁止法に条項を加えたもの。

コスタリカでは劣化ウラン弾が使われなかつたことはよかったですけれども、パナマ運河やプエルトリコでは、劣化ウラン弾が使用されていること、ラテンアメリカの若者たちが、米軍に参加していることもあり、身近な問題としてとらえることができているとのこと。自由貿易協定のなかに、劣化ウラン弾を扱わないという条項を加える動きもあります。アメリカの平和団体とも連携しています。最近の活動は、退役軍人の平和団体が、ヘーゲル国防大臣に 10 項目の要求を出しておらず、その中に一つが劣化ウラン弾に関するもので、そういう活動を ICBUW としても支持しています。

その後会場からの質問にそれぞれのゲストが答え、最後は、イラク戦争から 10 年たつにもかかわらず、劣化ウラン弾の放射能が原因の一つである可能性が高いがんの患者たちがきちんとした医療を受けられていないことに關し、我々は戦争を防げなかつた責任を感じ、医療支援を続けること。そして、2 度と劣化ウラン弾が使われないように、被曝者を増やさないことをめざし、劣化ウランを廃絶していくことを早稲田宣言に盛り込むことを会場の参加者らと合意しました。

（報告： JIM-NET 佐藤真紀）

第2分科会「ローズさんと語るイラク戦争検証」

■開催趣旨

イラク戦争で 19 歳の息子を亡くしたことをきっかけに、大義なき戦争に踏み切った英國・ブレア首相の責任を問う訴訟を起こしたローズ・ジェントルさんの話を伺うことで、同じくイラク戦争に加担した日本政府の責任を問う運動の参考にする。

■主催：イラクテ恩実行委員会/ピースボート

■ゲスト：ローズ・ジェントル

■発言者：志葉玲（イラクテ恩実行委員会）、吉岡達也（ピースボート）

■通訳者：竹内法和、サミュエル・アネスリー

■概要

志葉さんよりイギリスのイラク独立調査委員会(通称、チルコット委員会)の発足の経緯と現状についての説明がありました。チルコット委員会はブラウン首相が2009年に設置したもので、イラク戦争参戦の決定に関わった閣僚や政府高官、軍関係者からの証言や、機密に該当する分野の非公開ヒアリング、内部文書や書簡、メモの分析などを行ってきました。しかし、残念ながら結論は引き延ばされてしまっています。

「戦争に反対する軍人家族の会」の設立メンバーであるローズ・ジェントルさんは、2004年、当時19歳だった息子、ゴードンさんをイラク戦争で失いました。ローズさんは職業軍人の家族という立場でありながら、大量破壊兵器の存在という偽りの理由から侵略戦争を始め、多くの人の死を招いたブレア首相の責任を問う訴訟を起こしました。いずれブレア元首相を国際刑事裁判所にかけることも計画しています。また、ローズさんはチルコット委員会の結論に期待を寄せています。それは、他の遺族同様、息子を失った悲しみから次のステップに進むには、なぜ息子が亡くなったのかということを明らかにすることが不可欠だからだとローズさんは言います。ローズさんは勇気ある活動を継続できる理由を「息子を失った悲しみと怒り」であるとしつつ、「強い意志をもって戦争に反対すること」が必要であると語りました。

吉岡さんは、身近な一人の死に徹底してこだわり、誰がその死に責任があるかを明らかにし、その責任を法的に問うというローズさんの姿勢から私たち日本の市民が学ぶべきことは多いと語りました。過去の過ちの事実と原因を検証することは、同じ過ちを二度と繰り返さないために不可欠だということ改めて痛感しました。

第3分科会「アリさんと語るイラク占領の現実」

■開催趣旨

イラク人ジャーナリストのアリさんが取材してきた米軍によるイラク占領の実態や、現在のイラクの状況について話を聞きながら、私たちがイラクのために何ができるのかを論議する。

■主催：原 文次郎（イラクテン実行委員会/日本国際ボランティアセンター）

■司会：細井明美（イラクテン実行委員会）

■ゲスト：高遠菜穂子（イラクテン実行委員会/イラク支援ボランティア）

アリ・マシュハダーニ（ジャーナリスト、ロイター通信現地記者）

■通訳（アラビア語＝日本語）：重信メイ

■概要

主催者（＝原）より分科会の開催趣旨を紹介した後、メインゲストのアリさんを良く知る高遠さんから、アリさんの紹介を兼ね、彼が取材したイラク駐留米軍によるハディーサの虐殺（2005年）のケースが紹介され、続いて現在の状況は米軍がイラク軍に入れ替わっただけであるとして、デモに対する政府軍による弾圧、メディアへの圧力が強まっている状況が報告されました。

これを受けアリさんは発言を始め、米軍による占領の中で起きたことを伝えたい、米国がもたらした「民主主義」の帰結を見てもらうとしてイラクの現状を話しました。

紀元前に遡る歴史を踏まえ、大事に守られて来たイラクの歴史遺産が駐留米軍に破壊され、世界最古の文化遺産が失われた。米国やイラクに法律、政令を押し付けようとしているが、イラクこそが世界最古の法令を持っている。と述べました。

サルサールでは武装勢力を殺害したとの公式発表に反して、取材してみると民間人の女性や子どもたちが殺されていたこと。ハディーサでは民間人11名が誤認で殺害されたとする発表に対し、実際は24名が処刑

のように殺されたと報告。さらに米軍による家屋破壊や病院設備の破壊も報告されました。また、米軍の蛮行として、米軍が撮影したビデオ映像を映し、米兵がイラク人女性の首を切り殺害している事例が紹介されました。

また、アリさんがジャーナリストとしてそのような米軍の行いを明るみにしようと追及していたために米軍やイラク軍に8回拘束され、うち4回は米軍による拷問を受けたという体験を話しました。逮捕、拘束はイラクの治安にとって危険な人物という理由です。そして、最後に日本に望むこととして、イラク戦争のような嘘にまみれた戦争に参加するのではなく、教育で必要なインフラ整備に投資して欲しいと訴えました。イラクの再建に向けて、次の世代への教育こそが大切という考え方からです。 (報告: 分科会主催 原 文次郎)

第4分科会「イラク戦争と自衛隊・在日米軍」

分科会は、はじめに富山洋子さんが分科会を担当したWORLD PEACE NOWを代表して挨拶しました。パネル討論では、川口創さん(弁護士・イラク自衛隊派兵差し止め訴訟弁護団)、木元茂文さん(すべての基地に「NO!」を・ファイト神奈川)、谷山博史さん(日本国際ボランティアセンター・JVC 代表理事)の3人が問題提起しました。

川口創(かわぐち はじめ)さんは、名古屋訴訟の時に航空自衛隊に開示請求した資料が全面スミ塗でつぎつぎと出された一部を生々しく示しながら報告しました。そしてイラクに派遣された航空自衛隊の空輸活動が、憲法9条1項に違反する活動だという違憲判決の今日的な意義を、判決が根拠にしている平和的生存権と関連させて指摘しました。それは加害者になりたくないという意志をもつ市民が、権力の戦争政策に反対する行動をすることで平和的生存権をかちとることができる、というものです。安倍政権の改憲の動きにたいし、9条が危険な時ほど9条を使っていかなければならぬ、と結びました。

木元茂文さんは、イラク戦争から10年でアメリカ海軍との共同作戦に踏み込んでいく自衛隊を、映像を使って報告しました。イラク戦争後と東日本大震災での、横須賀や相模原に基地を置く日米両軍の共同作戦の様相は生々しいものでした。10年近くにわたって行われたインド洋での海上自衛隊による給油活動では、開始から終了まで938回、51万キロリットル、216億円が投入されました。ヨーロッパの艦隊が撤退した後半は、ほとんどが米軍とパキスタン軍の艦船に給油され、わざわざ自衛隊が給油することに意味はなかつたと指摘しました。さらにイラクに派遣された自衛官の犠牲者35名のうち、死因が自殺の者が16名にのぼっている。防衛相は派遣自衛官の退職後の精神疾患や自殺者については不明としているが、過酷な任務での負担が大きいことも指摘しました。

谷山博史さんは、イラクへの市民支援・復興支援と軍隊をテーマに報告した。問題の一つはNGOと政府との関係です。欧米や日本などの先進大国が自らの政治的利害に基づいて紛争当事者の一方に「悪玉=敵」とのレッテルを貼ることで、直接、間接の武力介入を正当化してきたために、NGOの人道援助が国による対立の構図に支配され、援助に極端な偏りが生まれること。いま一つは、イラクやアフガニスタンで行われている軍と民間を一体化した支援活動=PRTで、アフガニスタンでのJVCの活動に軍が介入した実例もはじめてPRTの問題点を指摘しました。紛争地への人道支援を続けてきたJVCの実践的で経験に根ざした報告でした。

200名近くの参加者はパネリストの迫力あふれる報告を聞き、山積する今日の課題に具体的でリアルに対抗していく勇気をもって分科会を終了しました。 (報告: 分科会司会・土井登美江)

3. まとめの会（16:45-17:30 201 教室）

最終まとめでは各分科会からの報告の後、市民の務めとしてイラク戦争を忘れないこと、今後も大義のない戦争を支持するような過ちを政府が繰り返さないためにも検証が必要なことを確認した上で、政府に検証を求めていくことを参加者一同で確認し、「早稲田宣言」を採択しました。



「イラクテン」実行委員会メンバーと参加の海外ゲスト

この日採択した「早稲田宣言」は内閣府を通して安倍内閣総理大臣に提出することを目指しましたが、内閣府が担当ではないとして受け取りを拒否したため、近藤昭一衆議院議員の仲介により、5月17日に同議員事務所で外務省中東アフリカ局・中東二課の首席事務官、外務事務官の2名と面談の上、手渡しし、安倍内閣総理大臣、および岸田外務大臣に届けるとの確約を得ました。



「早稲田宣言」を外務省担当者に手渡し(5月16日)

以上

2013年6月

「イラク戦争10年」キャンペーン(イラクテン)実行委員会事務局